



今回は、平成 23 年度に市町村国保で実施した特定健診結果のみ集計しています。
今後、協会けんぽ沖縄支部の結果とあわせて、改めてデータ集を発行する予定です。

1. 集計対象者

今回の集計対象者は、平成 23 年度に特定健康診査を受診した者（市町村国保分のみ）で項目ごとに検査値の記載のある者を集計した。

なお、項目ごとに分析を行っているため、全検査値が記載されていない者のデータも集計対象としており、項目ごとに対象人数が異なる。

2. 集計項目

(1) メタボリックシンドローム該当者・予備軍

腹囲、血圧、血糖、中性脂肪、HDL コレステロール、服薬状況をメタボリックシンドロームの判定基準により判定した。

ただし、腹囲の測定値が不足している者は集計対象外とし、腹囲以外の項目で不足があっても、判定可能な者は対象とした。

(2) BMI

(3) 腹囲

(4) 高血圧有病者・予備軍

収縮期血圧、拡張期血圧、服薬状況（血圧）の 3 項目揃っている者を対象とした。

ただし、血圧の測定値が不足していても、服薬中の者は対象とした。

(5) 糖尿病有病者・予備軍

HbA1c、服薬状況（血糖）の 2 項目揃っている者を対象とした。

ただし、HbA1c の測定値が不足していても、服薬中の者は対象とした。

(6) 脂質異常症有病者

中性脂肪、LDL コレステロール、HDL コレステロール、服薬状況（脂質）の 4 項目揃っている者を対象とした。

ただし、中性脂肪等の測定値が不足していても、服薬中の者は対象とした。

(7) 習慣的喫煙

(8) 飲酒の頻度

(9) 血圧（収縮期血圧、拡張期血圧）

(10) 空腹時血糖

(11) HbA1c

(12) HDL コレステロール

(13) 中性脂肪

(14) LDL コレステロール

(15) GOT

(16) GPT

(17) -GTP

3. 集計方法

2の各項目について、性別、年齢階級別、市町村別に集計し、(2)(3)・(9)～(17)については、平均・標準偏差等を算出しています。

4. 市町村別標準化異常比と95%信頼区間による検定

特定健康診査結果について異常値出現割合を比較する場合、受診者に高齢者が多い市町村では、異常値の出現頻度が高くなることから、異常値出現数を受診者数で割った異常値出現割合は高くなってしまいます。市町村間で異常値出現割合を比較する際には、このような受診者の年齢構成による影響を取り除いた指標を用いる必要があります。ここでは、その方法の1つとして標準化死亡比(SMR)に準じた算出方法による「標準化異常比」を用いて、市町村比較を行っています。

<標準化異常比の算出方法>

1. 資料(特定健康診査による健診データ)

- (1) 沖縄県(基準)の年齢階級別受診者数
- (2) 沖縄県(基準)の年齢階級別異常値出現数
- (3) 市町村国保(観察集団)の年齢階級別受診者数
- (4) 市町村国保(観察集団)の年齢階級別異常値出現数

項目

メタボリックシンドローム該当者・予備軍、高血圧有病者、糖尿病有病者、脂質異常症有病者、BMI、血圧、血糖、HDLコレステロール、中性脂肪、LDLコレステロール、GOT、GPT、 γ -GTP

2. 算出方法および検定方法

年齢階級別異常率(異常値出現割合:%)

$$(\text{年齢階級別異常値出現数} / \text{年齢階級別受診数}) \times 100$$

標準化異常比(県全体の年齢階級別異常率を基準とした間接法)

観察市町村の実際の異常値の総数 / 年齢階級別期待異常値出現数¹⁾の総和

$$^1) \text{県全体の年齢階級別異常率} \times \text{観察市町村の年齢階級別受診数}$$

95%信頼区間による標準化異常比の検定

- 標準化異常比の偶然変動の大きさを統計的に評価する -

分散の推定量は、異常値出現数をDとしたとき $\sigma^2 = 1 / D$

95%信頼区間は、**下限値** = 標準化異常比 $\times (1 - 1.96 \times \sigma)$

上限値 = 標準化異常比 $\times (1 + 1.96 \times \sigma)$

有意に高い : 標準化異常比および信頼区間の下限値が1より大きい (++)

高い : 標準化異常比は1より大きく、信頼区間の下限値は1以下 (+)

低い : 標準化異常比は1より小さく、信頼区間の上限値が1以上 (-)

有意に低い : 標準化異常比および信頼区間の上限値が1より小さい (--)